

## 「私に関すること」 „Was mich betrifft“ 1886年 54才

変に思われるかもしれないが、他の人が私について書いているので、私も書いておかなければならない。中略

私は、1832年4月15日にヴィーデンザール Wiedensahl で7人の兄弟姉妹の一番上として生まれた。父は小間物商、小柄でぼさぼさの短髪、働き者で節度をわきまえ、几帳面でいつも心配事をかかえ、こまやかではなく、冗談には理解を示したが愚行には厳しかった。パイプを片時も離さず、新しいもの嫌いゆえ葉巻には手を出さず、マッチではなく鋼と石の火起こし具や火付け用の木片を使い続けた。毎日夕方には一人で村を散歩し、ナイチンゲールが鳴く時刻には森にでかけた。母は、物静かでよく働き、信心深く、夕食後にはよく本を読んでいた。父と母は円満で家庭を大事にして、二人が初めて一緒に外出したのは結婚後20年以上も経ってからだった。

三歳の頃のことは、何を覚えているだろうか。作男のハインリヒは素敵な縦笛を作ってくれ、彼自身は口琴を奏でた。庭には丈の高い草が生え、エンドウはもっと高く伸びていた。藁葺き屋根の家の裏には、井戸がありその脇に水をいっぱい貯めた桶があった。その中に妹が横たわっているのを見た、まるでガラスのはまった額絵のように。母がやって来て、危ないところで妹の命を救った。今、私は妹の家に同居している。

注：この妹は、生涯兄に寄り添った1834年生まれのファニー

ブッシュの兄弟姉妹 Fanny (1834), Gustav (1836), Adolf (1838), Otto (1841), Anna (1843), Hermann (1845)

歌の本の歌詞、聖書の物語、いくつかのアンデルセンの童話が、私の最初の読み物だった。

9才になったとき、エーバーゲッツェンに住む母方の叔父にあずけられることになった。寂しい気持ちもあったが、楽しみでもあった。中略 馬がひく荷車で同行したのは、祖母、母、4人の子供、子守の娘、作男のハインリヒ。シャウムブルクの森を抜けてゴトゴト進むと、鹿の群れが道を跳ねて行き、空には星がめぐった。二晩親戚の家に泊まり、エーバーゲッツェンの牧師館に着いた。叔父は（現在80才を過ぎているが健勝）堂々たる風采で、冷静な自然観察者でとても穏やかな人だった。叩かれても仕方がないことを何度もしてかしたが、たった一度だけ枯れたダリアの茎で叩かれたことがあった。それは村の知的障害者をからかった時であった。

到着したその日に、粉ひきの息子と友達になった。この友情は長続きした。私は毎年のように彼を訪ね、粉を挽く器械のガタゴトいう音や水のゴウゴウいう音を聞きながら、いつも熟睡するのだ。

村の宿屋の主人で小間物を扱っていた年上の友達もできた。黒い体毛はネクタイに入り込み、袖から出て爪までびっしりと生えていた。・・・中略・・・ 彼は私にとって常に愛すべきひょうきんな人間でありつづけた。花の栽培が上手で、嗅ぎタバコの愛好家で3度結婚をした。彼の家でぶ厚い楽譜の本と、当時の自由な信仰思想の書物を見つけた私は、それをむさぼり読んだ。

叔父の訓育を受けていた私は村の学校に通わなかったので、先生は生存中、私に権限をふるうことはなかった。だが、彼が首を吊り自殺をはかり、落下して喉をかききり、私の寝室の窓辺のすぐ下に埋葬されてからは違った。毎夜たとえ暑い夏の夜であっても、私は毛布の中にしっかり潜って夜を過ごした。日中は自由思想にかぶれても、夜になると幽霊を見ていたのだ。

勉強においては、当然のことだが得手と不得手に別れていた。一番好きだったのは、物語を読むこと、絵を描くこと、それにマス釣りや鳥の罠をしかけることだった。中略

1845年頃、叔父の一家はリュトホルスト Lüthorst の教区に引っ越した。私の部屋の窓の下では小川が音を立てていた。向こう岸には一軒の家があり、それは夫婦喧嘩の舞台であった。亭主は勝利した暴君の役で、美人の飾らない女房の美德が勝利をおさめることはなかった。

学校の科目に韻律法が加わった。国内外の詩作に触れシェイクスピアも読んだ。「純粹理性批判」も手に入れた。さらっと目を通しただけだったが、自分の脳の中のパーゴラの下を散歩したいという気持ちになった、その頃すでに私の脳は日陰の場所が多かったが。

16才になり、ソネット（十四行詩）と計算方法の知識を得て、ハノーファーの高等工業学校への入学が許された。純粹数学では一番の成績に登りつめた。1848年には、牛のように太い脚をして、歩哨の休憩室でそれまで親しんでいなかったタバコとビールをのむ権利を勝ち取った。この3月に覚えた習慣のうち、最初のものを守り通しているが、二番目は年のせいで今ではかなり後退している。

3.4年ハノーファーで暮らした後、ある画家の勧めで、デュッセルドルフの美術学校の古代彫刻陳列室へいった。消しゴムとパン切れとチョークを使って、重要視されていた石版印刷の「核」となる技法を学んだ。

私は、デュッセルドルフの美術学校からアントワープの絵画学校（王立美術アカデミー）へ移り、ケースブリュッケの角にある床屋に下宿した。亭主はヤン、女房はミーといった。静かな夕方は、私は緑のガウンを着て口に陶器のパイプをくわえて、一緒に店の前に座って過ごした。籠編み職人、時計職人、ブリキ職人、黒塗りの木靴を履いた娘達など、近所の人達もやってきた。ヤンとミーは情が厚く、女房は太り亭主は痩せていた。交替で私の髪や髭を整え、病気（チフス）になったときは親身に看病してくれた。病が癒えて療養のために故郷へ帰る際には、暖かい赤い上着とオレンジを3個プレゼントしてくれた。数年経ってから、感謝の気持ちを伝えに懐かしい床屋があった町角を訪ねると、すべてが新しくなっていて、ヤンとミーは亡くなっていた。ブリキ職人だけが、狭苦しい仕事場で相変わらずブリキを叩いていた。彼は見知らぬ人を眺めるように、眼鏡の奥から陰鬱な目つきで私を見た。どんなに悲しかったことか。 中略

アントワープでは、初めて昔の巨匠の作品を目にした。ルーベンス Peter Paul Rubens、ブラウエル Adriaen Brouwer、テニールス David Teniers、フランス・ハルス Frans Hals。彼らの神々しい軽やかな表現は、シミを付けたり、引っ掻いたり、削ぎとったりすることはない。ほのかに輝く宝石のような魅力をたたえる、何も隠す必要のない良心の純粹さは、いつまでも私の心を捉え憧れの対象となった。私は彼らに屈服し、他の多くの人達のように、僭越ながら絵を書くことで糧を得ようと心底思った。勿論その試みは続いている。実現されなければならないのだ。スリでさえ、毎日仕事にでかける。いまだ成果は無に等しいのだが、つましい生活環境の中でいまでも模索しつづけている。

アントワープを去り、(病気療養のため故郷の) ヴィーデンザールに滞在した。土地の人々が語る「昔話」は耳新しいものだった。私は正確に聞き取った。一番多く話を語ったのは、年老いた、穏やかな、普段は寡黙な男だった。窓を叩くと、彼は嬉しそうに顔を出した。ストーブの傍で、パイプにタバコを詰めて吸い、煙をはき出すと、かれは母親から聞き覚えた話を始めた。かれはゆったりと語ったが、佳境にはいると立ち上がり、登場人物の台詞にあわせて顔の向きを変えるのだった。そのたびに普段は前に垂れている三角帽子

の先っぽが、あちらこちらへと揺れた。

ヴィーデンザールからリュートオルストに住んでいる叔父を訪ねた。隣町の愛好家の集いは、叔父の活動分野への興味をかき立てた。私は、ミツバチの不思議な生態や、叔父の単為生殖に関する著作や観察の虜になった。ブラジルへ渡り養蜂家になるということも考えたが、この計画は実現されなかった。養蜂にたずさわるといのは、見当違いだった。この自然科学への愛着からダーウィンの著書を読むことになり、のちにショーペンハウワーに傾倒すると少し後退したが、ダーウィンへの興味は続いた。彼の呈示した鍵は、この世界の呪われた城の多くの扉を開けるのに役立つように思われた。ただ出口を開けることはできなかった。

リュートオルストからミュンヘンへと、風が私を運んだ。アントワープを出航した小舟は、当時の主流であったアカデミックな潮流に乗り損ねて座礁した。それだけにますます芸術家協会の誘いは魅力的だった。そこで飛び交った冗談、特に人を嘲笑しからかうものの公表を私は望まなかった。愚かな言動が何の役にたつのか。匿名で世の中にでたととしても、望むか否かにかかわらず、いつかは作者を捕えて放さなくなる。

「フリーゲンデ・ブレッター」（絵入り週刊誌 1845-1944）から声がかかったのは、1859年だった。氷の上に男が二人、そのうちの一人の頭が無くなる話だった。私は木版の上で語った。他の作者同様に娛樂欄に描くことが許され、さまざまな願望やアイデアを表現したいと思った。まもなく絵物語の連載が始まり、時と共に発展して、作者が予想できなかったほど好評を博した。手にしてくれた読者は、絵物語は私の人生の中で燃え上がったものが努力により鍛え上げられたもので、無目的に制作されたものではないことにおそらく気づくだろう。これらは全部故郷のヴィーデンザールで、誰の助言もえずに、自分の楽しみのために制作した。食べるために描いたものと、寓意的な一編を除いてだが。

中略 ミューズを楽しませる作者は、本の虫で変わり者と思われている。本の虫というのは当たらないが、変人というのは少し当たっている。知らない人との文通における怠惰は、死を持って罰せられても仕方がない。彼は、礼儀正しく社交の楽しみを評価し、くつろいで楽しみを享受するようには調教されていない。しかし、少人数（4人、多くても6人）の夕べの語りには、朝までもつき合う覚悟がある。

私のことはこのぐらいにしよう。古い知人に関する苦情は、随分前から従姉妹に任せてある。私が愛し尊敬する多くの人のことについては、沈黙を守ろう。そのほうがよいように思われるから。

翻訳：岡部由紀子